

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520077

研究課題名(和文)「狂歌」を端緒とした近世後期の地域文化形成に関する研究

研究課題名(英文)"Kyoka" as a Means to Study the Formation of Regional Culture in the Late Edo Period

研究代表者

高橋 章則 (Takahashi, Akinori)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：10187990

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「狂歌」に関わる人々が江戸期の地域文化の形成に果たした役割を多角的に検証するものであり、狂歌人に代表される広義の「学問者」の「知」の構造を思想史的・文芸社会史的に考察することを目的とした。

「狂歌」を特筆したのは、「狂歌」が様々な書物等を前提とした幅広い教養の上に立って作成されていたからであり、全国的なネットワークを通じて狂歌人が地域に多様な人的・物的資源をもたらしており地域文化形成への貢献度が高いからである。

こうした「狂歌」や狂歌人についての検証から導出された知見は、江戸期の地域文化の再評価のみならず、現在の地域社会再編成の潮流に文化面での視座を提供するものである。

研究成果の概要(英文)：The present work is a multilateral examination of the role played by the people connected with "kyoka" (satirical verse) in the formation of Edo-period regional culture. It is an attempt to study the structure of the "scholarly wisdom" represented by kyoka poets from the perspectives of intellectual history and the social history of art.

The reasons for examining kyoka are: 1) kyoka were written in the context of a widespread culture founded upon a variety of written materials, and 2) kyoka poets created extensive personal and material resources in local regions through a nationwide network and made important contributions to the formation of regional culture.

Not only does the knowledge derived from an examination of these kyoka and kyoka poets provide for a reassessment of regional culture in the Edo Period, it also offers a culture-based vantage point on current trends in the reorganization of contemporary regional society.

研究分野：文芸社会史

キーワード：狂歌 近世後期 地域 文化 連

## 1. 研究開始当初の背景

18世紀末の天明年間に江戸でピークを迎えた「狂歌」は次第に享受者を地方に拡大し、19世紀に至ると「判者」(撰評・教授有資格者)が地方の村々に点在するほどになった。彼らは地域において「連」を組織し毎月の定例会(「月次会」)で地域の狂歌人の作品を添削指導するとともに、江戸に本拠地を持つ全国「連」の毎月の作品集(「月次集」)への応募を促し取りまとめた。こうして「狂歌」の全国ネットワークが確立していったが、そのネットワークを支えた地域の狂歌人の実態については未解明な部分が多い。

その主たる理由は、(1)狂歌人が本姓名ではなく「狂歌号」を用いるために個人を特定することが難しいこと、(2)近代に至り狂歌への関心が衰退し「月次」の作品集の作成が激減したこと、さらには(3)「月次」という制作行為を文学的観点から否定し価値なきもの(「月並」平凡)として葬り去ったことにある。

これによって、「狂歌」や狂歌人が江戸時代の社会とりわけ地域社会にあって果たしていた文化的機能への検証の道が絶たれ、狂歌人のもとにあった諸種資料は価値を見いだされないまま散逸の憂き目を見た。

ところが、狂歌人の多くは地域の文化的なリーダーであり、蔵書家であることが多く、地域の文化状況を把握するキーパーソンであることが一般的である。というのも、「月次」(毎月の制作)を特徴とする19世紀の「狂歌」では事前に「兼題」と呼ばれる歌題が提示されており、作品制作段階で広範な「書物」が参照され作品に取り込まれていた。その「書物」こそが、当時隆盛を見た出版資本が提供した出版物「板本」なのであった。狂歌人は諸種「板本」を江戸から取り寄せ確保するとともに、地域民に蔵書の閲覧を許したりしたのである。狂歌人が文化リーダーであり蔵書家であるとはその意味からである。

したがって、「狂歌」や狂歌人を手がかりとすることは地域の文化状況把握の一要諦なのであり、狂歌人のもとにあった蔵書の分析は彼らの学問状況・思想状況の正確な把握の基盤たりえる。また、散逸の進む地域文化資料の確保や保存を効率的に推し進める系口も、狂歌人の発掘から始まると言っても過言でない。

本研究の担当者は、2007年刊行の『江戸の転勤族一代官所手代の世界ー』(平凡社)において江戸幕府の代官所の所在地を中心に地域文化の形成に関わる代官所下級役人のありようを論じ、平成18~22年度科学研究補助金(基盤(C))を通じて「天領」(幕府領地)の文化・思想形成に検証を加えた。それによって実姓名が判明し、生業や活動の実態が把握可能となった狂歌人は複数にのぼり、彼らが地域文化の形成に関わった具体的

な場面の紹介も行った。たとえば、「天領」が多く存在した現福島県域においては、「狂歌」の「判者」であった代官所役人が「連」のネットワークを通じて全国に地域文化を紹介したこと、傘下にある地域の狂歌人ともども地域文化の再編に関わったことなどが明らかになった。

一方、従来から一般的な保存の処置をとられつつも、その意味や価値が不明なまま未活用であった狂歌関連資料をめぐって、調査時に史料的な意義を説明し地域での利用を促すとともに保存方法の工夫を求め、それに応じて「町興し活動」を開始した市町村や保存整理方法の変更を行った公共機関や所蔵者が現れた。

本研究が目指すのは、これまで主に調査対象としてきた「天領」に加えて、商業地などの都市部や農村・山村・漁村等に調査地点を拡張することであり、地域文化の特色を学問形成・思想形成の側面を中心に検討することである。その際の重要指標として「狂歌」を位置付け、地域個々の特色を「狂歌」に即して精密に議論することを目的とする。

なお、「狂歌」の作品集(「狂歌本」)の中には挿絵等に色摺りの部分があるもの(いわゆる浮世絵)が少なくない。近代に至り、そうした「絵入狂歌本」に注目し蒐集したのがオランダをはじめとする外国人であった。そのため「狂歌」に関連する「書物」の有力な所蔵先は海外にある。ところが、海外では「狂歌本」は専ら美術研究の対象と位置付けられ、歴史的な観点さらには地域文化史的な観点からは検証されてはならず、「狂歌」の社会史的な意味についての視点を欠く担当者は国際浮世絵学会の機関誌『浮世絵芸術』160(2010)に掲載された論文において、狂歌と浮世絵との関連、浮世絵師と地域文化との関連に言及した。

本研究においては、本研究が採用する社会史的・文化史的な視点の有効性を表明する意味をかねて海外での調査・報告を行うことを重視し、「狂歌」を通じた日本文化の紹介を目的の一つに加えたい。

## 2. 研究の目的

地域の文化状況を把握する際に「狂歌」ならびに狂歌人に着目することが有効であるという本研究の基本視座は、歴史学と文学という二つの異なる研究領域の重複部分において成立する。また、狂歌関連出版物の重要部分に浮世絵師が描く挿絵のような絵画資料が存在するという事実への接近は、文学と美術史学の連携の上で成り立つ。一方、狂歌人の作品制作のバックグラウンドに和・漢の広範な「書物」が控えているという事実の意義を解明するためには、文学と思想史学の研究成果の相互乗り入れが必要となる。

なお言えば、狂歌人は「知識」の拡充過程

で国文法を含む江戸期「国学」の成果を吸収し、国学の専門家となる者が少なくなく、幕末の変革に関わるものも現れた。狂歌人の思想形成の問題は、政治史・思想史の領域の中心テーマにすら踏み込むことになるのである。

従来あまり聞きなれない「狂歌」を取り上げ、それを指標として地域の文化事情に迫ると言うことは、歴史学・文学・美術史学そして思想史学の研究の横断的総合につながる。のみならず、自治体史の項目執筆者などの地域研究者から研究情報の提供を受け、資料の所在を確認し閲覧する。その上で研究情報の共有をはかり、資料保存の道筋を提示することは、地域調査研究の連携的な手法の提起の意義をも有する。

上記の視座に立って、本研究においては、「狂歌」や狂歌人に関わる出版物・文献・史料の把握をめざすべく基礎的調査を行い知見の総合化を行う。すなわち、

- (1) 地域の狂歌人に接近する調査方法・技術の確保・拡充を行う。あわせて、武士であり商人であり農民であるような狂歌人の社会的な実態に迫る。具体的には、狂歌関連文献のうちには一般的な史料には見られない伝記的な記述が散見する。加えて、「狂歌本」においては居住地が正確に記されている。その伝記的な記述のデータベース化、さらには居住地の可視化(マッピング)、地域狂歌人の数的把握を行う。
- (2) 蔵書家であることが確認される狂歌人については、蔵書の質的な特色を明らかにする。儒書・仏書・歌書などといった書誌的な把握はもちろん、「書物」の入手先を含む個別書籍が含む情報の把握につとめる。
- (3) 地方の狂歌人は村落における中心階層に属することが多く、従来、彼らの多くは専ら政治面での動静が把握されてきた。しかし、一方では「狂歌」に見られるような文化面での貢献もなしてきた訳であるから、そうした政治面・文化面相互の関わりを総合的な伝記的事実として把握に努める。言い換えるなら、地域社会の全体構造のなかに占める狂歌人の意義を明らかにする。
- (4) もちろん全国に展開する「狂歌」の学問的・文化的環境を検証し評価することは、一研究者の短期間の研究では困難である。しかし、研究担当者が調査の過程で入手した「四方側」(19世紀の狂歌界にあって最大勢力を有した鹿津部真顔の率いた全国「連」)の「判者」・「准判者」名簿を活用すると、狂歌が展開した地域の可視化の基準を設定することが可能であり、調査地点設定の目安となる。その基礎資料を用いて全国の有力地点に赴くならば、有効な地域調査を実施することができる。

以上、本研究が目指すのは、江戸後期における地域の学問・思想・文化の構造さらには地域の住民の文化への取り組みの全体像の把握である。それを通じて、これまで主に解

明されてきた学者や思想家の学問的な営為との相関に言及し、江戸後期の学問・思想の特色を明らかにすることを最終的な研究目標としたい。

(補足)学問的な特色

従来、江戸後期の「地域」の学問・文化の展開については、藩校や郷学などに目が向けられ、笠井助治『近世藩校における学統学派の研究』など、かなりな程度の研究蓄積がある。しかし、そこで主に把握されたのは専門的な学者や思想家の学問的営為が中心であり、藩政改革・維新変革などの政治動向との繋がりを求めるものが大半である。地域における学問や思想の幅広い享受者への検証は将来的な課題とされてきた。

(1) 本研究があえて「月次」の語に象徴される恒常的な文化行動をとともなう「狂歌」を研究視座に掲げるのは、従来の研究が扱いかねた地域に根ざし生活した広範な「学問者」への検証を行うためであり、検証の過程で学問や思想の有する社会的な機能を幅広くすくい取るためである。本研究の独創的な点に掲げるとすれば、従来ややもすると「平凡」であるとして処理されてきた地域の「学問者」に対する多岐な検証視点を設定したことにより、同様にして多様かつ流布の数量が多いため扱いかねた「板本」のような平凡な出版物を「蔵書家」というような出版史・社会史的な観点から再評価しようとする点にも特色がある。

(2) 「地域」を扱った地方自治体史にあって「文化」の領域の占める比重は低いのが実状である。それは、先述のような細分化された学術研究や個別分断的な地域の検証の仕方と不可分であり、地域が学問や文化の総合的な展開の「空間」として位置付けられてこなかったこと、地域における「知」の営みが一部の例外を除いては閉鎖的に展開したとする低評価、さらには全国的な文化・思想潮流との接点を求めかねたことなどに起因する、と考える。今後の地域研究にあっては、そうした地域文化研究をめぐる負の認識に意識面での変更が不可欠と考え、実際に本研究に関連する調査報告を行うことから地域文化を指標とした町興し活動の活性化がなった例がある。本研究は地域住民の文化にまつわる意識の固定化を打開する可能性を有する。

(3) なお、本研究の基本的な視座はフランスのアナール学派の「書物の社会史」に連なるもので、同様の関心は近年、中国、韓国などの東アジア諸国で高まっており、特定領域「東アジア出版文化研究」のプログラム以後、分担研究者として国際協業を行ってきた。本研究はそうした書物研究をめぐる国際的な比較研究の場面に確たる視点を提供するものであることは言をまたない。

もちろん、主たる当該分野である日本思想史の研究分野に対して、史料的な制約の改善や研究領域の拡大をもたらすものであると

確信する。

### 3. 研究の方法

「地域調査」に主眼を置き、研究成果の地域への還元を目指す本研究が採用した研究方法は、大きく(1)史料の収集・調査とそこで得られた史料のデータベース化と、(2)各種文献の読解・検討である。その際の史料とは、歴史資料に限定されるものではなく、文芸史料・美術史料など広範な文化史料である。

そうした史料を調査地域に赴き発見・調査した。また、その史料的な価値・意義を既存の学問領域に照らして再確認するばかりではなく、地域文化の新たな学問領域としての書物文化研究を模索すべく、多様な評価基準を設定した。

もちろん、地域の歴史性・地域文化の独自性などについては既存の自治体史などの記述には見入るべきものも少なくなく、それらの上に新たな知見を付け加えることを眼目とした。

年度による作業上の差違は基本的には無いが、新規に資料を見いだした際には現地に複数回赴くなど、調査に重点を置く研究方法を採用した。

### 4. 研究成果

本研究は、「狂歌」に関わる人々が江戸期の地域文化の形成に果たした役割を多角的に検証するものであり、狂歌人に代表される広義の「学問者」の「知」の構造を思想的・文芸社会史的に考察することを目的とした。

「狂歌」を特筆したのは「狂歌」が様々な書物等を前提とした幅広い教養の上に立って作成されていたからであり、全国的なネットワークを通じて狂歌人が地域に多様な人的・物的資源をもたらしており地域文化形成への貢献度が高いからである。

こうした「狂歌」や狂歌人についての検証から導出された知見は、江戸期の地域文化の再評価のみならず、現今の地域社会再編成の潮流に文化面での視座を提供するものである。

なお、本研究が重点的に調査を行った地域は、新潟県上越市直江津地区・神田地区(平成24年度・26年度)、山形県天童市(平成25年度)、宮城県大崎市(平成27年度)であり、「狂歌本」の大規模な所蔵機関で九州大学附属図書館の調査を平成26年度に行った。

また、研究成果の途中段階での報告は下記の学会・研究会で行ったが、重点調査地域で報告会を随時設定した。さらに、ローマ・ヴェネチア(イタリア)、ライデン(オランダ)、パリ(フランス)等で「狂歌」関連文献の調査を行い、「狂歌」についての知見を周知す

べく啓蒙的な資料解説を行った。これらにより今後同種の調査・研究を行う際の基盤作りを行うことができた。

特に研究の最終年度であった平成27年度には、本研究の成果をまとめ、成果を公開し「狂歌」研究の意義を発信すべくし、宮城県大崎市三本木で開催された市民講座で研究報告を行い、参加者から新たな地域情報を得ることができた。また、「狂歌本」とともに日本文化関係資料の閲覧を得たイタリア・ヴェネチア市においては、ヴェネチア大学において公開講演を行い、天保期における「連」の再編成の問題と「連」の構成員と深い関わりを持った歌川広重の問題を提起し、日本文化に深い関心を寄せる同大学学生に「狂歌」研究の将来性を説くことができた。

江戸時代は世界的にも稀なほどに出版文化の花開いた時代とされ、多様な分野で各種書籍が出版されたが、なかでも本研究が重視した「狂歌」をめぐる出版は浮世絵を含む多岐な出版分野と連携しつつ展開した。それらの書籍類を地域の狂歌作者たちは活用した。

本研究においては、「狂歌(特に19世紀の狂歌)」が、江戸との繋がりを有する地域の知識人がこぞって制作したものであり、日・中の古典さらには地域的な景物、日常的の些事に至るテーマを幅広くかつ「典拠」をもとに詠んだことを実証的に明らかにした。

そして、その際の典拠となったのが江戸を中心に生産された「書物」であり、狂歌は書物に支えられ詠まれた。さらには浮世絵などの出版物も大いに参照に供されたことについても、「狂歌本」「狂歌摺物」の実物に即して検証し、その実態を明らかにした。

このような本課題の研究成果のおおむねは、出版をテーマとした「書物出版と社会変容」研究会をはじめとした国内の研究会のみならず海外で開催された研究集会で報告を行い、また隣接する研究領域である文学の分野の日本近世文学学会などで報告され、論文は国際浮世絵学会に機関誌などにも掲載されたことにより、歴史的にも学問的にも認知の度合いが高くなかった「狂歌」の地域文化形成に果たした役割という研究視座への社会的な了解が高まったと確信する。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

高橋章則

武家役人と狂歌サークル、『シリーズ本の文化史』第1巻、査読無、69 - 102頁、2015年

高橋章則

「狂歌」に結実する地域の文化、『講座東北の歴史』第5巻、査読無、295 - 320頁、2014年

高橋章則

思想の流通 - 月次な学芸世界、『岩波講座日本の思想』第2巻、査読無、51 - 82 頁、2013年

高橋章則

表現される遊女から表現する遊女へ、『男と女の文化史』、査読無、47 - 74 頁、2013年

高橋章則

「故俳諧歌場真顔居士追福香花集」広告二種 - 真顔没後の四方側 - 、書物・出版と社会変容第13号、査読無、183 - 233 頁、2012年

〔学会発表〕(計 5 件)

高橋章則

「江戸近郊八景」の後景 広重と淮南堂三世連、「書物・出版と社会変容」研究会2月例会、2016年2月6日、一橋大学

高橋章則

「歌川広重白筆画稿本『狂歌文茂智登理』について、「書物・出版と社会変容」研究会7月例会、2014年7月26日、一橋大学

高橋章則

「天童広重」の背景にあるもの、日本文芸研究会第65回総会・研究発表大会、2013年6月8日、山形大学

高橋章則

江戸文化理解のキーワード「月次」、「日・蘭・伊三大学国際シンポジウム」、2013年3月18日、ローマ大学(イタリア)

高橋章則

月次な学芸世界 - 飛脚問屋支配人富田永世の狂歌・和歌・和学 -、「書物・出版と社会変容」研究会9月例会、2012年9月29日、一橋大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 章則 (TAKAHASHI AKINORI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10187990

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：